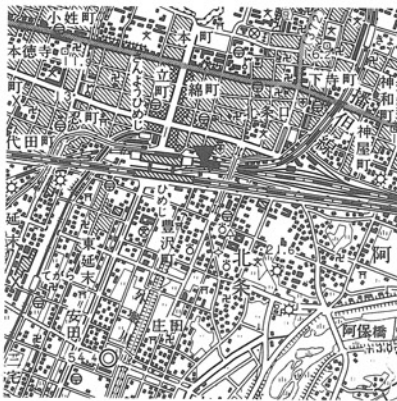


ひめじえき
兵庫・姫路駅周辺第四地点遺跡(仮称)

- 1 所在地 兵庫県姫路市朝日町・駅前町
- 2 調査期間 一九九九年年度調査 一九九九年(平11)七月～二〇〇〇年一月
- 3 発掘機関 姫路市教育委員会
- 4 調査担当者 中川 猛
- 5 遺跡の種類 集落跡(平安時代後半)、城下町(江戸時代)、交通遺跡・姫路駅駅舎(近代)
- 6 遺跡の年代 弥生時代前期～平安時代後半、江戸時代、近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(姫路)

姫路駅周辺第四地点遺跡は、姫路市の中央に位置し、JR姫路駅構内に所在する。遺跡周辺には市之郷遺跡、市之郷廃寺、豆腐町遺跡、播磨国府推定地である本町遺跡などがあり、古くから開けた地域である。一九九八年度から引き続き調査

を実施している。今年度の調査は、第三遺構面を中心に実施した。古墳時代中期の流路、一六世紀代の流路、遺跡の東方を南流している市川の支流と考えられる河道、平安時代後半の井戸・柱穴・土坑などを検出した。また一九九八年度の調査においては、遺物包含層から、円面硯や播磨国府系軒丸瓦などが出土している。

木簡が出土した遺構は、平安時代後半の井戸である。二基の井戸が切り合う状態で検出された。二基の井戸に構築時期の差はあまりないと考えられ、古い方の井戸SE〇二から、木簡が出土した。井戸は二基とも一辺約七〇cm、掘形直径約二m、遺構検出面から深さ約一mで底面に至る。井戸SE〇二の井側は、二隅に支柱を残すのみで、ほとんど残存しておらず、井戸の構造は判然としない。しかし、新しい方の井戸SE〇一には、井側が良好に残っており、方形縦板横棧支柱型であることから、SE〇二も、構造的に類似するものであったと想定される。井戸内の埋土は、上から大きく茶褐色粘土層・黄灰色粘土層・黄褐色砂層の三層に分層できる。木簡は、黄灰色粘土層から、白磁皿・土師皿・塀などとともに一点出土した。

8 木簡の积文・内容

(1) (符籙) □ (鬼カ)

(125)×4×2 081

木簡は、上下とも折損しており、原形は不明である。内容から呪符木簡と考えられる。また、木簡と共に、竹筒が井戸底に刺さった

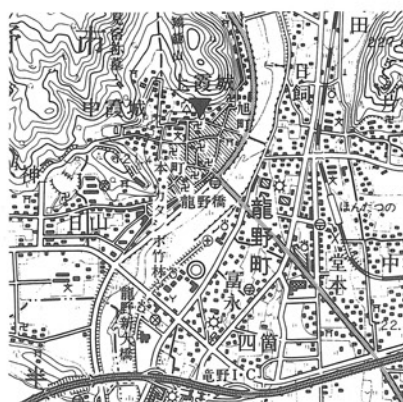


状態で出土している。土圧のため、竹の節が抜かれていたかどうかは、確認できなかったが、出土状態から、井戸の廃棄に際して、「息抜き」が行なわれた可能性が指摘できる。木簡もそれに伴って用いられたものと推察される。

なお木簡の釈読にあたっては、兵庫県立歴史博物館の小林基伸氏のご教示を得た。

(中川 猛)

兵庫・龍野城跡 たつのじょう



(龍野)

- 1 所在地 兵庫県龍野市上霞城
- 2 調査期間 一九八九年(平1) 九月～一〇月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 4 調査担当者 大村敬通・井守徳男・村上泰樹
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 一六世紀～一九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は兵庫県南西部の揖保川中流域末端の右岸に位置する。

龍野城は播磨守護職赤松氏の庶流である赤松村英によって、標高二三〇mの鶏籠山(のとりかご)上の山城及び南麓の三の丸が築かれたとされる。赤松氏滅亡後、豊臣政権下の支配を経て、徳川政権下で元和三年(一六一七)の本多氏入封以降、城を山麓に移した。寛文二年(一六七二)に脇坂氏が五万三千石で入封して以